

# 教会のシオニスト化

エドワード・ハンドリー

1800年代、シオニスト・ユダヤ人にとって、新しいイスラエル国家に関する計画を成功させるには、米国からの財政的支援が必要であった。

1800年代、米国は圧倒的にキリスト教国であった。

パレスチナを支配下に置き、その地域にイスラエル国を再建するならば、必ず当時政治的影響力を持っていた米国のクリスチャンのグループの抵抗にあうことが予想された。

米国のクリスチャンは、イスラエル国への出資を阻んでいた。

シオニストは、自らの計画に対して予想されるクリスチャン側の抵抗を取り除く必要があると理解し、プロテスタント教会の神学を親イスラエルに変えることに決めた。

イエズス会士の中でこの任務を遂行する神学者はすでに存在していた。

イエズス会は、エルサレムにユダヤ教の神殿を再建することによって自らの失われた支配的地位を回復すべく、ある神学をプロテスタント教会に注入する計画を立てた。

神殿では、動物犠牲と旧約聖書の律法が回復されるであろう。

キリストは神殿に戻り、千年王国の間、そこから世界を支配するであろう。

クリスチャンたちは、ユダヤ人が作ったパレスチナのイスラエル国家が復興したことを預言の成就と見るであろう。

そうすれば、結果的に、政治的な抵抗は止み、むしろイスラエルを支援するようになるだろう。

さらに、カトリック教会は、プロテスタント神学が教皇を反キリストと認識しないようになることを望んだ。

そのために、プロテスタントのクリスチャンの注意を未来の反キリストに向け、ローマにいる反キリストから目を逸らすようにする必要があった。

イエズス会は新しい「キリスト教」終末論を作ろうとした。

そこでは、反キリストは隠ぺいされ、神の預言計画においてユダヤ人に支配的な地位が与えられた。

イエズス会とその追従者たちは、この新しい未来派/シオニスト神学の作成に役立つ聖句をかき集め、それらをつなぎ合わせて出鱈目なパッチワークを作り上げた。

最終的に、この新神学はタルムードユダヤ人が支配する神学校に導入された。

その神学校の卒業生は、作為・無作為を問わず、世界中で彼らの新しい「キリスト教」神学をプロテスタント教会に導入した。

6500万部を売り上げた16編の小説からなる『レフト・ビハインド』シリーズは、この新神学に基づいている。

『レフト・ビハインド』シリーズは、映画化され、世界中の教会によって大いに推奨され、大人気を博している。

暗黒の時代に、「教皇こそ反キリストである」と信じた勇敢なキリストの証人となった数千万人のクリスチャンがローマ・カトリック教会によって処刑された。

事実、プロテスタントの宗教改革の基本的主張の一つは「教皇は反キリストだ」であった。

この見解は、聖書によって十分に裏付けることができる。

教皇が反キリストであるという考えに対して、かつてプロテスタントの諸教派の間ではほとんど異論がなかった。

実際、ウェストミンスター信仰告白(英国国教会)では次のように記されている。

「主イエス・キリスト以外に、教会の頭はいない。ローマ教皇は決してそれではない。ローマ教皇は反キリスト・罪人・滅びの子であり、教会においてキリスト及び神と呼ばれるものすべてに逆らって自らを称賛する」

モーランド(ワルドー派)告白 1508年及び1535年、スイス告白 1536年(スイス)を含む他のプロテスタント信仰告白は、教皇を反キリストと認めている。

今日、そのような信条を保持する教会は少数である。

実のところ、近年、教皇が反キリストであると主張するクリスチャンは、過激で無慈悲であると評価される。

プロテスタントの諸教派の中でどうしてこのような変化が起きたのだろうか。

ローマに対するプロテスタント諸教派の見解の変化は、ローマ・カトリック教会のエージェントによる組織的なキャンペーンの直接的な結果であった。

ローマ・カトリック神学者が利用した方法の一つは「黙示録の多くの箇所は未来に起きる」と述べることであった。

1590年、フランシスコ・リベラというローマ・カトリックのイエズス会士の聖職者が、その500ページの著書において、黙示録のほとんどの出来事を世界の終末の直前に起きると述べた。

リベラは「反キリストは、世界の終末の直前まで出現しない個人であり、エルサレムを再建し、キリスト教を滅ぼし、キリストを否定し、教会を迫害し、3年半の間世界を支配するであろう」と述べた。

別のイエズス会士ロバート・ベラルミーノ枢機卿は、リベラの教えをさらに推し進めた。ベラルミーノは、当時もっとも有力な枢機卿の1人であった。

1930年、ヴァチカンが彼を聖人及び「教会の博士」に列した。

『メシアの栄光と威厳の来臨(The Coming of the Messiah in Glory and Majesty)』という著書が著者の死後11年たった1812年に出版されるまで、プロテスタントの諸教派は、このカトリックによる黙示録の解釈を受け入れなかった。

デイヴ・マクファーソンは、著書The Incredible Cover-Upにおいて、患難前携挙説[つまりディスペンセーション主義のプレ・ミレのこと]の教義が、マーガレット・マクドナルドに由来すると述べている。

それによると、エドワード・アーヴィングの教会の代表者とジョン・ネルソン・ダービーが、マクドナルドのカルスマ的リバイバル集会に参加した。この集会において、マーガレット・マクドナルドは、ある幻を見、預言をした。この預言こそが、患難前携挙説の土台となったと言われる。

ダービーは、プリマス・ブレスレン派のメンバーであった。

ウィリアム・キンボールの Rapture, a Question of Timing によると、マクドナルドが幻を見た後、しばらくしてアーヴィングもダービーもこの新しい教義「患難前携挙説」の熱心な信者になった。

これは、ダービーの患難前携挙説のアイデアがマクドナルドに由来することを暗示している。

...

1827年にダービーは、はじめて患難前携挙説を説いた。この年は、ラクンザの著書のアーヴィングによる翻訳本が出版された年でもあった。このことから、ダービーはその教理をラクンザから学んだとも考えられる。

とにかく、一般には、この教理の大衆化に貢献した最大の功労者は、ダービーであると考えられている。事実、初期に、この教えはダービー主義と呼ばれていた。

ダービーは、神学的にラクンザやアーヴィングと関係していた。さらに、ローマ・カトリックがダービーに対して継続的に影響を与えていたことを示す証拠がある。

1871年、ダービーは英訳聖書を出版した。ダービーの翻訳は、カトリック教会が使用している間違いの多いアレキサンドリア写本に基づいている。

ダービーの翻訳のいたるところに、サタンの仕掛けが見える。ダービーは、マタイ 23・14、使徒 8・37 を省いた。ルカ 2・33 において、ダービーはヨセフをイエスの父と呼んでいる。イエスは神の御子であるにもかかわらず。...

ダービーは、1862年から1877年にかけて、7度アメリカを旅行している。その旅行を通じて、預言的解釈の方法を広めた。

サイラス・インガーソン・スコフィールドは、ダービーの教義を完全に受け入れた。スコフィールドは、ダービーの教えをジェームズ・H・ブルックス博士から学んだ。博士は、セントルイス市のコンプトン・アヴェニュー長老教会を牧会し、ダービーの信奉者であった。

スコフィールドは、その有名なスコフィールド・レファレンス・バイブルの解説の中で、ダービーのディスペンセーション主義を説いた。スコフィールド・レファレンス・バイブルは、1909年に出版され、300万部以上売り上げた。当時、聖書に解説の注を加えることは一般的ではなく、「注もコメントも入れない」ことをモットーとする聖書協会の方針に反していた。

スコフィールドの聖書翻訳は、世界シオニスト指導者たちから融資と支援を受けていた。彼らは、アメリカのキリスト教会をパレスチナにユダヤ人の故郷を作る計画の妨害者とみなしていた。

これらのシオニストたちは、教会に侵入し、その教義を変える計画を実行し始めた。この目的を達成するために使用した2つのツールは、サイラス・I・スコフィールドと、世界的に有名な老舗の出版社オックスフォード大学出版であった。

親シオニストのサブカルチャーによってキリストの福音を変え、教会を堕落させることが計画されていた。

「スコフィールドの役割は、親シオニスト的な注を欄外に書き込むことによってキング・ジェームズ訳聖書を書き換えることにあった。」

(C.E. Carlson, The Zionist Created Scofield "bible," [http://christianparty.net/...](http://christianparty.net/) (website address current as of August 9, 2003).)

1909年、オックスフォード大学出版は、スコフィールド・レファレンス・バイブルの販促のために多額の広告費を計上し、使用した。

スコフィールド・レファレンス・バイブルは、新しいアイドルとしての現代イスラエル国の周りにサブカルチャーを作るための口上であった。

新イスラエル国はまだ存在していなかったが、十分な資金を持つシオニストたちは、すでにその設計図を図板の上に載せていた。

「原著者であり著書名の由来となった人物の没後、スコフィールド・レファレンス・バイブルは、何度か改訂された。1967年版には、親シオニストの注が大量に追加され、スコフィールドによるもっとも重要な注が、シオニストの目的の速やかな達成にとって障害であるという理由で原版から削除された。しかし、この版のタイトルは、The New Scofield Reference Bible, Holy Bible, Editor C.I. Scofield のままである。」

この反アラブ的、シオニスト「キリスト教」サブカルチャー的神学を通じて、イスラエル国及びその土着のパレスチナ人たちへの野蛮な抑圧に対する、「クリスチャン」の側からの揺るぎなき支援が培われてきた。

(Edward Hendrie, Solving the Mystery of BABYLON THE GREAT: Tracking the Beast from the Synagogue to the Vatican, pp.253-254.)